

第一章

序論

A. 背景

現在、異文化コミュニケーションは非常によく盛んであること。しかし、このコミュニケーションはうまく出来いけるとは言えずわれなが、様々な問題があり行い、誤解となってしまうに巻き込まれることもある。この問題はコミュニケーションをしている人々に言語の違い比較だけではなく、言語の知識の他に使用した言語につれての社会的習慣を理解していなかったためでもあるから、表れる。この現象は NS(Native Speaker)と NNS(Non-Native Speaker)のコミュニケーションでよく見られるということもある。

社会的習慣の一つ、コミュニケーションでの誤解の一つの原因となる社会的習慣元になる可能性は発話行為である。例えば、日本語での命令は必ずしも命令文であまりを使用せずにしないこともあり、疑問文または平叙文を使用して表現することができる。例えば次の例があるようだ。

(1) エアコンが ついていますね。

発話(1)は疑問文で、聞き手に窓を閉めてほしいといういる依頼として使用する。しかし、話者の意思はその発話で誤って解釈される可能性がある。例えば聞き手はその発話が依頼を思われず、なくコメントとして「ああ、そうですね」または「ええ、そうです」と反応してしまった。この場合、聞き手は話者の意思にかけて答えられなかった。それでコミュニケーション活動は繋がらなかった。

実際に、話者の意思を表すため、直接法に命令文を使用し、(2)と(3)に見えるようだ。話者の意思を表す直接疑問文の発話(4)命令文よりあまり直接とは言わずれ、(1)により(4)のほうがははっきり話者の意思を表すことである。

(1)を使用して話者は賢いそうである。

(2) 窓を閉めてください。

(3) 窓を開けないでください。

(4) すみません、窓を閉めてくれませんか。

上記のようなを説明する問題は、詳しく教えることと教えられるべきで、徹底的に開発することも必要であろうだとおもう。そうすると、れで言語教育は4つ技能だけでなく、学習するアプローチを発展すると共に日本語学習アプローチに対して5C(*Communication, Culture, Conections, Compharisons, Communities*)を与えることである。それで、それをするとコミュニケーション能力の整合性が日本語学習者によって支配される可能性が高い *suparjo(2008)*

に述べた。また、それでその能力を使用する学習活動が必要になると思われ
る。

謝罪行動に話者の謝罪が積極フェイスの相手の違反を避けるためである。

それがコミュニケーションでの協力として行われる。

木谷 et.all (2010)による日本語学習者の謝罪行動と日本人の謝罪行動に比べ、自己互換性行動がないので他の人に謝りを起こし、他の人に謝罪する場面である。Oyunbireg (2004)に基づいてアンケートをする。

あなたはレポートを書くために、相手から専門書をかりていました。ところが、不注意でその本を汚してしまいました。相手に会ったときになにを言いますか。

謝罪行動の反応

先生、すみません。お借りしていた本なんですけど。不注意で汚れてしまったんです。本当にすみません。買ってお返しします。

Salah satu contoh dalam bahasa Indonesia:

(7) Sensei, sebelumnya saya minta maaf, jadi gini sensei, kemaren saya minum teh trus ga sengaja saya numpahin tehnya di atas buku sensei yang saya pinjem buat referensi, saya meminta maaf sensei, klo bukunya masih di jual di toko buku saya akan ganti yang baru sensei, saya benar-benar minta maaf.

(5) と (6) は聞き手は先生で、話者は学生である。(5)の発話は日本人の使用したストラテジーで、発語内行為指示表現(IFID)を注意すると、相手が

話者に許してもらいたいたがる意思が簡単に明らかにわかった。そうして、本を汚す原因ははっきり説明することである。

でパートナー=聞き手は話し手によると先生、そして学生のスピーカ=話者であることを示す。発話(5)、日本の人々によって使用される戦略で、観測することの発語内行為指示表現によってお問い合わせ/パートナー=聞き手はどのようなスピーカ=話し手によって伝達されることが私たちは/パートナー=聞き手が彼を許すことができるという希望を知っていると述べた。総本では長ったらしいの説明を提供するだけでなく。その後、彼の間違いを介して、スピーカ=話し手は、聞き手はスピーカ=話し手が行うことの問題を解決するというパートナー=聞き手への補償を提供する。

インドネシア 語母語話者の で最も印象的なのはスピーカとは異なりその本を汚してしまった汚い書籍、より多くの理由が多く、の説明がありその後のためスマット先生の本の不快を感じている「先生」頭字語の単語を言及している。次に使用される戦略は、ツールのスピーチを示すことでしたスピーチ(6)、説明を提供し、代わりに提供するために、責任を引き継いだ。

我々は日本語学習者と日本の謝罪演説上記の違いを確認すると、き。必要な音声良識が謝罪するので、明らかに少しない良いとの通信を行うことができるます。ザールで発行された理由の多くは日本に謝罪する場合、彼らはより多くが信じていないだろうと彼は反対のように述べた。

第一言語 (L1) を持っているさまざまな人々が異なる言語、言語 P 第一言語・第二言語に大きな差があるとして一方、負の転移が容易に生じてくる。様々な要因の影響は、他の主観的なビュー、年齢、動機などの間で、その文化とで、ターゲット言語の学習者の相互に第一言語である。

そのためだけではなく言語構造のターゲット言語習得だけ/ターゲット (L2) の学習第二言語の最終目的地とした。しかし、実用的な語学教育の買収は非常にターゲットの学習を必要とされた。ターゲット言語を使用するときにミスをする。小柳で、表現：カスパー&ローズ (2000 1999)

...L2 の習得は、形態素や統語を習得することにとどまらない。社会的なコンテキストにおいて適切に言語を使うにはどうしたらいいかという語用的な知識も必要ある。そのような L2 の知識の習得を扱う分野を中間言語用語論 (Interlanguage Pragmatic) と言う。

発話行為が時折第二言語を作るために L1、負の転移で実行方法に関連する知識。基本的にはスピーカ―話し手とのパートナ―聞き手に存在するコミュニケーション、行動や文化の違いでエラーにつながる可能性があるという。それは当たり前である。

発話行為が時折第二言語を作るために L1、負の転移で実行方法に関連する知識。基本的にはスピーカ―話し手とのパートナ―聞き手に存在するコミュニケーション、行動や文化の違いでエラーにつながる可能性があるという。

そこで、~~これは~~本研究は「インドネシア語の転移による日本語学習者の謝罪行動」について研究をする。~~である。~~

B. 問題の設定及び範囲

本研究の問題の設定は次のようである。

1. 日本語を学んでいるインドネシア人学習者学生が行う謝罪行動はどうであるか。
2. ポライトネス理論の面から見れば、行われた謝罪行動はどうであるか。~~はいかにそのような認識を見るのか。~~
3. 行われた謝罪行動はインドネシア語からの転移は行う謝罪行動にはどうであるか。

本研究の問題の範囲は日本語学習者への謝罪発話行為の行為の実現においておける研究の問題を制限し、またそのような音声を実現する上でインドネシア語からの負の転移及び正の転移である。

C. 研究の目的標及び意義

本研究の目的標は次のようであだと考えられる。

1. 日本語を学んでいるインドネシア人学習者学生が行う謝罪行動を知るため。
2. ポライトネス理論の面から見れば、行われた謝罪行動を知るため。

3. 行われた謝罪行動はインドネシア語からの転移は行う謝罪行動を知るため。

本研究は、対象言語に不可欠な学習と異文化コミュニケーションの問題を開発するための努力における日本語教育教材の開発にメリットを提供することが期待される。この時間の中に日本語の学習は認知的側面にのみ焦点を当てている。とより頻繁に文法的な目標言語について説明する。感情と精神面でも異文化コミュニケーションがうまくいくできるように、彼女のニーズを充足する必要がある。

ターゲット言語としての日本語学習の整合性はフィールドでの通信需要の形式になる。社会の現実にはできるだけ近いので、学習のいずれかを試してみる。第二言語習得では、最初の言語の影響は、対象言語を学習困難の問題を克服するために考慮されるべきである。この研究の結果で特に謝罪の物語、実用的な能力の開発に基づいている日本語の教育に新しくし、代替ソリューションをすることが期待される。

D. 基礎的な定義

1. 言語転移

言語転移は (も-L1 の干渉、言語干渉、および crossmeaning としても知られている)、第二言語に母国語の知識を適用する スピーカー=話し手

または書き手作家を指す。それは、最も一般的学習と教育言語の文脈で議論されているのが、誰かが言語のネイティブレベルのコマンドを持っていないときは、第二言語に翻訳するときと同様に、どんな状況でも発生する可能性がある。

2. 発話行為

発話行為は、個々の症状態、心理的、および生存率が特定の状況に対処する言語スキルのスピーカー=話し手により決定される発話（発話行為）である。(Austin, 1962 :98-99)

3. 謝罪行動

対人コミュニケーションの観点から、(apologizing) 謝罪発話行為は、スピーカー=話し手の賦課に配置される。彼は彼が言ったのパートナー=聞き手の気持ちを維持する必要があるため、このように、"負担"は、スピーカー=話し手に依存するより丁寧な言語を使用する。言い換えれば、話し手が謝罪の形で彼の願いを望んだために（と一般的に振る舞う）話をする礼儀正しさの一形態として考えられている、その後、彼は"説得"しようとする（または可能な"力"）彼は責任の嘆願書の形態として、彼の謝罪を受け入れるためにパートナー=聞き手を述べて社会的責任、調和の

とれたコミュニケーションを維持する。この方法では、肯定的な礼儀の形を示している。(Brown & Levinson (1987) dalam Aziz (2001:5))

E. 研究の方法及びデータ収集技法

1. 研究の方法

本研究では、記述的分析法を使用している。この方法メソッドは、実際の問題に対処するために科学的な手順を使用し、この時点で発生する現象を記述、説明するために行われている (Sutedi, 2009).

本研究の性質が概説され、研究者の関心の中心を作ったすべての問題を把握しの写真を撮り、それが何であるかを記述レイアウトする。

2. 研究の時間及び場所

本研究は、3年生及び4年生の日本語のクラスの学生で2週間実施した。研究は、インドネシアの教育大学の日本語教育大学の学科で実施された。

3. サンプル

本研究のサンプルでは、2009/2010年度の第六学期の3年生の学生および第八学期の四年生の学生で、2009/2010年度。サンプルは全部20人である。4年生の15人及び3年生の5人で、合計20人である。このレベルの日本語能力で彼らは中上級段階に既にあるので、サンプルは、意図

的サンプリングの手法によって選択され**ました**。日本語で構文とコミュニケーション能力を有する。日本語の学生 3 年生および 4 年生の能力分類は中上級のレベルである。会話の学習の非開の値の末尾に基づいてサンプルを取った。だから、学習者の日本語における謝罪の発話行為に関する研究を行うことが可能になる。

4. 研究の技法

本研究では**説明記述的研究**である。データは談話完成タスク (DCT) を詰めるという形でアンケートを通じて収集した。このアンケートは、**パートナー=聞き手が言ったとスピーカー=話し手の間の発話のやり取り**で**あ状況の置換合計が含まれている**。それぞれの状況では、各参加者によってもたらされる社会的な要因がリコールとタイプを説明した。状況の説明は、各回答者が記入する空白が続いている。**型置換**の形で要求された答えの形式は、実際の状況にある場合、どの**スピーカー=話し手**が発話される可能性が高い**かを調べる**。次に例**見てもみようを示す**。

場面 1#

あなたはレポートを書くために、相手から専門書をかりていました。ところが、不注意でその本を汚してしまいました。相手に会ったときになにを言いますか。

あなた： _____

(Ouyonbireg, 2004)

上記の器具は主な器具であり、学習者の謝罪行動と礼義正しさとインドネシア語から転移を知るため、使用する。

DCT の配った後データを収集始めた。確認するため、動機または理由を知るためサンプルをインタビューする。発生する日本語学習者、その発展を見て、より継続的、および転移に謝罪発話行為の使用を決定するために行われる主なデータ収集ツール。

データ収集の技法

研究データは定性的かつ定量的に分析した。最初に、定性的な考慮事項に基づいていくつかのカテゴリに分類されたデータの置換を実現する。さらに、各発話行為のストラテジーの出現頻度は全体の両方の発話行為の実現、および社会的な変合計の傾向別の傾向を検出するために、定量化されている。傾向の傾向やパターンは、特に言語の礼儀の側面との関連を明らかにするために、定性的に分析される。この日本語学習者の学生に何が起こるかなど、その転移後である。

Formatted: Indent: First line: 0.2"

F. 本論文の構成

第一章はじめに背景調査の説明、問題分析、問題の定式化、研究の目的、ユーザビリティ調査、アウトラインとデータ収集技術およびアプローチの研究手法、および試験サンプルの場所、およびデータの分析が含まれている。

第二章は言語、語用論、謝罪や言語に言語行為論の良識の移転に関する理論の理論的基礎を含んでいる。両方の言語に謝罪発話行為の実現の比較として、日本とインドネシア語における謝罪の発話行為に関する以前の研究である。

第三章では、研究課題、研究の回答者、データ収集手順、およびどのようにすでに収集されたデータを分析するための研究の方法論が含まれている。

第四章は本研究の結果に関するデータとの議論は、すでに問題の定式化に関する研究の質問に答えるために収集されたデータの分析を含む分析。インドネシア語から発生する転移のフォームを分析する。

第五章結論と意味の撤退と研究の結論が行われていることを提案、日本語学習者の謝罪の発話行為に関する研究の提案である。